梟VS雄鶏

マルクス生活過程論の探究・近況

田畑　稔
（たばた　みのる／本誌編集長）

季報『唯物論研究』162号 2023年2月

私は1980年代から「マルクス再読」を続けてきた。そして2018年の論文「マルクスにおける「生活過程」の位置について」（本誌、142／143号に連載）以降は、「マルクスと生活過程」をテーマに研究を続けている。すこしその近況を綴ってみたい。

私を含め、今日のマルクス研究は①「ソ連型社会主義」や「ML主義」の根本的総括を柱にした「20世紀問題」、②「ML主義」の呪縛を解いてマルクスの画期的意義と歴史的限界をマルクスに内在して再研究する「19世紀問題」、そして③山積する人類史的規模の危機を前に我々はマルクスから〈特に〉何を学び、マルクスをどの方向に「開く」のかを主題とする「21世紀問題」、この三つに〈同時に〉取り組んでいると言ってよいだろう。

「20世紀問題」にやや疲労困憊気味の私の世代とことなり、斉藤幸平をはじめ若いマルクス研究者たちが多く輩出し、「21世紀問題」をテーマに言論世界で活躍、国境をこえたネットワークで議論している。「潮目が変わった」と見るのは希望的観測に過ぎるかもしれないが、今日の深刻なグローバル状況を考えると、むしろ自然な事態であると言えよう。

「マルクスと生活過程（Lebensprozeß）」という私のテーマも「21世紀問題」を扱っている。ただし直接には、エコロジーや現代資本主義や現代国家や侵略戦争や米中覇権衝突や情報革命の光と影や周辺部やジェンダーや現代変革論といった、21世紀世界が直面する実践的課題で、マルクスと21世紀を繋ぐという志向なのではない。哲学畑で生きてきた私としては、それら実践的問題意識を組み込みつつ、〈思想の枠組みそのもので〉マルクスと21世紀を繋ぐ作業をめざしたいのである。

一

「生活過程」論は『ドイツ・イデオロギー』（1845／46）執筆の最終局面で急浮上するが、仕上げられないまま放置されたものである。そこで使用された言葉を基本踏襲しながら、「マルクスとともに、マルクスを超えて」試論的ではあれ体系的に提示してみたい。これが私の姿勢である。繰り返しで恐縮だが、暫定全体図は次のようになる。

A・総過程（Gesamtprozeß）としての生活過程
　A-a 現実的（wirklich）生活過程（現に作動しつつある存在様相でみた総過程）
　A-b 社会的（gesellschaftlich）生活過程（単位社会における総過程）
　A-c 歴史的（historisch）生活過程（マクロな変容過程として見られた総過程）
B・生命過程（生活過程の地盤＝エレメント過程）
　B-a 地球環境下の生命史的生態学的過程
　B-b ヒトおよび生理学的身体過程
C・部分諸過程
　C-a 物質的（material）生活過程（生活諸手段の生産、分配、交換、消費の諸行為、諸構造、諸過程）
　C-b 社会的（sozial）生活過程（人間たちの相互諸行為、その諸構造、諸過程）
　C-c 政治的（politisch）生活過程（社会の公的総括、その諸行為、諸構造、諸過程）
　C-d 精神的（geistig）生活過程（認識、価値判定、行為コントロール、学習の諸活動、諸構造、諸過程）
D・個人的生活過程（総過程を〈織り込み〉つつ営まれる人格的（persönlich）生活過程、「生きられる」身体過程を含む）

二

総過程はマルクスで頻出する概念である。たとえば『資本論』第3部は「資本主義的生産の総過程」である。『資本論』第2部第3編「社会的総資本の再生産と蓄積」では、総過程は相互に独立な個別諸資本の循環が絡み合い（Verschlingung）、相互前提、相互条件づけのなかで行う運動の総体である。

つまり総過程の概念は、総体を複雑な分節化と複雑な相互媒介の両面からなる動的過程として把握しようとする姿勢を示している。「総（gesamt）」はあくまで経験をベースにもつ全体把握であることにも注意しておかねばならない。

なぜ総過程の前景化が必要か。たとえばB生命過程は生活過程の地盤（エレメント）過程であり、C－a物質的生活過程はBに直接連接する「ベーシックな」部分過程であって、この両過程はそれぞれ one of them として単純に他の諸過程と並立できるわけではない。その特別な位置にも着目せねばならない。とは言え、たとえば土台／上部構造論のように優越的な条件づけ関係への着目〈だけ〉では、「土台」自身も総過程により条件づけられていること、つまり分節化と相互媒介の動的過程の内部にあるという事態が視界から消失し、現実的生活過程のアクチュアリティーを見失ってしまう。総過程視点の前景化なしには「21世紀問題」にも応えられないと考えるのである。

三

マルクスの用例にあたる限り、この総過程を表す生活過程概念としては三つ挙がる。このうち特に重要と思われるのはA－a現実的生活過程とA－c歴史的生活過程である。

A－a現実的生活過程についてはこの間、論文「現実、意識、イメージ、そして幻想」（本誌158号）を書き、また東京グラムシ会での報告「現実性と実在性の差異について――マルクスとグラムシを繋ぐもの」（2022年7月30日）を行った。さらに小論ながら「脳生理学的唯物論の検討」を書いた。この種の唯物論は、action-reaction-interaction-joint action-counteraction の連鎖交差する過程としての現実過程をさす、ひたすら心脳関係に視界を限定し、もっぱら実在過程としての脳過程の精密な観察と記述を志向する。その結果、「私」を「脳が産出する錯覚」としてとらえてしまう。こういう危険な倒錯を脳生理学的唯物論が孕んでいることを確認した（『提言』202号、2022年11月1日）。

マルクスの「フォイエルバッハ・第1テーゼ」（1845）やグラムシ「実践の哲学」は明らかに「現実性」を、したがってまた生活諸活動とその連鎖交差の過程を原理とする思想である。グラムシは言葉としては real を用いているが、独訳や日本語訳は wirklich や現実的をあてている（『獄中ノート』Q10-1-§8 など）。ヘーゲルでも現実性は客体の論理と主体の論理を媒介するきわめて重要な位置を占めていて、可能性や必然性や偶然性が動的に絡み、活動の媒介による可能性の現実性への転化もそこで扱われている。

しかしかつての「弁証法的唯物論」で権威の一つとされたレーニン『唯物論と経験批判論』（1908）は唯物論を主に実在論として解釈し、現実性（Wirklichkeit）と実在性（Realität）の差異の自覚的提示を欠いていた。「意識は独立な物質の反映である」というテーゼが反復される（拙論「マルクスとレーニンの差異について――レーニン哲学におけるマルクス不在問題」『社会主義理論学会年報』創刊号、1992年2月、参照）。しかし現実性のみが、つまり生活活動諸主体が意識的に、すなわち生活活動自体を認識、価値判定、行為コントロール、学習の対象とし〈つつ〉、環境的自然や主体的自然や他者や組織や物とのあいだで行う action-reaction-interaction の連鎖交差の過程のみが、自分自身と対象の実在性を同時的に確証するのであって、逆ではないのである。

また想像や幻想や倒錯は確信内容が「非実在」だとはいえ、生活活動や攻撃行動の意識的契機としても強く働くのであって、「非現実」だなどとはまったく言えない。カルト宗教に入信した母が全資産を寄付名目で収奪され、事実上3人の子供を見捨てた。「大東亜共栄圏」のための戦争だとか、天皇は「現人神」だとの宣伝で侵略戦争に動員され、他者を殺害し戦死した。実在性だけで済むのなら同意獲得のヘゲモニー闘争も自由な相互批判的言論も不要であろう。我々は実在するだけでなく、現実的生活過程を生きているのである。

四

もう一つの総過程である「歴史的生活過程」の展開は、実に包括的で困難な課題である。とりあえず今年の1月25日に大阪労働学校の講義で「晩期マルクスが直面した諸問題」について整理してみた。1859年の『経済学批判』序言は従来、マルクスの意図とは別に、「唯物論的歴史観」の「定式」とされてきたが、1873年か

ら1883年までの晩期マルクスの仕事を追跡しつつ、この四半世紀に近い時間の経過のなかで、マルクスの歴史観にどんな変容が確認されるのか、まずは見極めようと考えたのである。

晩期マルクスも色んな問題に直面しているが、何といっても強く印象付けられるのは、ロシアに広範に残存する農耕共同体の崩壊→共同体農民のプロレタリア化→ロシアの資本主義発展、このコースが果たして不可避なのか。この問題をめぐるナロードニキたちとの意見交換である。マルクスはフランス語版『資本論』（1872-75）でこの不可避性を西ヨーロッパに限定し、1877年には「特殊研究」なしに自分の説を「万能の合鍵」として「歴史哲学的一般理論」に変質させることを強く拒否している。農耕共同体が孕む私的所有のエレメント（家屋と付属地の私有）と集団的所有のエレメント（農地の共有と定期的再分割）のどちらが勝利するかにかかわる「オルタナティブ（alternative）」が確認され、1861年の農奴解放令の線で進むとその崩壊とプロレタリア化は不可避となるが、逆に農耕共同体が「同時存在」である資本主義的生産の肯定的諸成果を「集団的生産」のエレメントとして利用し、資本主義を経由せず「ロシア社会の再生」型の発展の道を歩む可能性も否定されない。

晩期マルクスのこの認識を総過程としての歴史的生活過程論の面で見ると次のような一般化に繋がるのではないか。（α）一旦成立したシステムが拡大再生産されていく「累進的再生産（reproduit sur une échellé progressive）」の論理が資本蓄積論や拡大再生産論などで理論化されるが、（β）これは「同時性」の歴史空間において①ドミナント（dominant,herrschend,hegemonic）な形態にすぎず、②補完的（complement）諸形態、③隷属的（subordinate）諸形態、④対抗的（opposite）諸形態、⑤周辺的（peripheral）諸形態、⑥古層的（surviving）諸形態などと、相互媒介的に併存 coexist し続けている。（γ）またこのドミナントなシステムの「発生」（la genèse）の論理は、拡大再生産の単純な論理とはまったく異なる。旧制度の解体過程で、一方の商業資本家的貨幣蓄積、他方の生産手段から暴力的に分離された労働者大衆という二つのエレメントが、一定の「歴史的環境」下で、偶発的創発的に結びつき、新たな循環軌道にのる。これは略奪や征服や奴隷化や暴力的追放などを含み、典型と非典型、順序の不均等を含む「歴史的運動（le mouvement historique）」から説明される（『資本論』第1巻「資本蓄積論」の最後に描かれる「本源的蓄積」や「近代植民理論」も参照）。（δ）晩期マルクスの「オルタナティブ」の議論は、資本主義を超える諸形態の「発生」「生成」にかかわるもので、ここでもそのための「諸

エレメント」はすでに歴史空間に存在するが、それらを創発的に相互媒介的循環軌道に乗せるための「歴史的運動」こそが問われている、このことを確認しようとするものであろう。

とりあえずはこの辺りを切り口に「歴史的生活過程」関連の膨大な作業に取り組みたいと思っている。

五

C-c 政治的生活過程については、この間、大藪龍介と意見交換する機会を得た。彼の『国家とは何か――議会制民主主義本質論要綱』（2013）に私がコメントし（本誌157号、2021年11月）大藪からリプライをいただいた（同161号、2022年11月）。私のコメントの主旨は大藪国家論には政治行為論の位置づけが欠けているのではないか、「社会の公的総括」というマルクス政治的生活過程の端初規定に一旦戻ることで、行為、構造、過程の全体を射程に入れ、「国家の社会への再吸収」というマルクスの問題意識を今日的に再構築しなければならないのではないかということであった。大藪のリプライの第1は、私の議論が一般論すぎて近代国家の諸側面を射程に入れた専門的議論の水準に達していないということであった。これはその通りで、私自身、それを前提に議論している。第2点は大藪が資本論解釈に関する宇野理論の原理論をモデルとして、近代国家論の原理論を（マルクスとは違いイギリスを古典例として）展開しようとしたということであった。この第2点目は私が「マルクスの生活過程論」で目指しているものが何であるかを、反面的に自覚するうえで大変ヒントになった。

たとえば『資本論』の端初概念は商品である。この端初概念の分析段階ではじめて、この商品形態に閉じ込められている生活諸活動（生活手段の生産・分配・交換・消費）が形態の内容面として浮上させられ、制度形態の内的矛盾展開に繋げるという形をとる。しかしドミナントな形態は唯一の形態でもなく、一枚岩の形態でもない。国家もまた極めて重要な物質的生活過程の制度でもあるし、なによりも歴史空間には農耕共同体や労働者協同組合のように古層的、周辺的、対抗的諸形態も併存していて、その一部はオルタナティブ的未来社会のエレメントをなす可能性も秘めている。物質的生活過程の端初規定は当然これら諸形態を包摂するものでなければならない。ドミナントな制度形態の学的認識が自己完結的目的ではなく、ドミナント形態の内外にある「オルタナティブ」の諸エレメントの創発的相互媒介軌道のための「歴史的運動」が問題なのであるから。

中世ヨーロッパのように精神的生活過程を宗教が独占していた時代でも、精神的生活過程の端初規定をドミナントな制度の概念把握のための端初規定と混同してはならないし、学問、芸術、哲学のような領域区分と混同することも許されない。ましてイデオロギーという精神的生活のパースペクティブ的構造と混同することもできない。私の場合は認識、価値判定、行為コントロール、学習、想像、表現などと精神的生活活動の基本形態を列挙し、それらを活動、構造、過程の三層でとらえ、他の部分諸過程との総過程的媒介の内部で論じることにより、超複雑な精神的生活過程にアプローチしている。

大藪との議論をとおして確認できたことは、政治的生活過程の端初規定（社会の公的総括、その行為、構造、過程）とそのドミナントな形態としての近代国家の関係を一層多くの媒介を入れて論じることの必要性である。政治体制も、官僚制も、政治行動への諸個人の参加形態も、反乱や社会運動も、中心と周辺、国家機構と市民社会、地域政治と国民国家政治とグローバル政治、行動レベルと構造レベルなどできわめて複雑である。「社会の公的総括」機能が「社会に再吸収」される形態、そのための諸エレメントの確認も問われる。しかしだからこそ端初規定はこれらを包括できるものでなければならないのではないか。

六

最後に「個人的生活過程」にかかわる研究の近況を紹介しておこう。諸個人は総過程を織り込みながら有限な一回きりの人生を織り上げる。時間面では循環的時間、段階的時間、危機の時間の複雑な組み合わせである80年前後（現在の日本の場合）の人生を生き、世界面では2人称の他者との親密圏を中心に人称的に分節化した諸関係からなる生活世界を生きる。生活活動も、いのちの再生産、労働、相互行為、政治行為、学習や精神的生活活動、遊び、戦略的活動、「危機を生きる」など、複雑に分節化している。時々刻々に変化する状況の「意味」をその都度「理解」しつつ、適切な行為を選択しつづけ、私、他者、組織、自然、ものの間の action-reaction-interaction-counteraction の連鎖交差の現実的生活過程を生き続けねばならない。

この個人的生活過程関連で最近取り組んだのは「「生きる」思想」についてである。哲学茶話会での報告「「生きる」思想について考える」（『地域アソシエーション』214号、2022年10月）および大阪哲学学校での同タイトルの報告（2022年11月）である。後者は https://youtu.be/6J40Mb43poc で見ることができるので検討いただきたい。

個人的生活過程も総過程を織り込みながら織り上げられるので、たとえば身体もB-b生理学的身体とは明確に区別されるべき「生きられる（belebt）」身体としての質を伴う。同じように思想も世界で展開する各種の「大きな思想」と、諸個人が出会いや危機や体験を重ねつつ、構築、変容、改造を反復し身につけている「「生きる」思想」とは明確に区別されねばならない。諸個人が生きる場合、その都度一定の認識パタン、価値判定基準、行為格率が働く。これらは通常はセンス化されルーチン化されているが大なり小なり普遍的な質、したがって思想の質を伴う。危機局面ではそこに孕まれている分裂が顕在化し、改造も迫られる。危機に際して社会運動が媒介し「大きな思想」が「織り込まれ」、「「生きる」思想」が再編される場合もあるが、逆に「「生きる」思想」が社会運動を媒介に「大きな思想」に変容を迫る場合もある。

釈迦の「人生は苦である」とかニーチェの「生きることは支配することだ」に賛否の反応をすることが問題なのではない。ソクラテスの言う「生活の吟味」、グラムシの言う「全員哲学者」の線で思想の現実形態を追跡すると、この「「生きる」思想」の問題が浮上してくる。私も自分自身の「生きる」思想について対自化を試みてみた。傍目八目でなかなか難しいが、皆さんも一度試みてみてはどうだろうか。

近況

最近、植村邦彦や的場昭弘の本を何冊か読む機会があった。いつもながらこの二人のマルクス研究の視界の広さ、データの膨大さに圧倒される。研究室や書庫も溢れかえって大変だろうなと、要らぬ心配までしてしまう。